

胎児・幼児期にディーゼル排ガス

胎児期や幼児期に浴びたディーゼル自動車の排ガスが、子宮内膜症に影響する可能性の高いことを、栃木臨床病理研究所と東京理科大のグループがラットを使った実験で確認した。原因が分からない子宮内膜症とディーゼル排ガスとの関係を確認した成果は初めて。子宮内膜症は不妊原因の一つとなっており、今後の研究が注目される。

子宮内膜症は、子宮の内側でない場所に内膜ができる病

東京理大グループ

気。月経のある女性の約1割がかかっているとも言われ、増加傾向にあるが、原因はほとんど分かっていない。

研究グループは、01年に子宮内膜症の病変部にアレルギー反応が生じていることをヒトで初めて確認し発表した。そこで、アレルギーとの関係が指摘されるディーゼル排ガスに着目し調べた。

実験では、環境基準の10倍に相当する濃度のディーゼル排ガスを1日6時間、妊娠中の雌ラットに浴びせ、

子宮内膜症に影響

子の雌ラットにも排ガスを浴びせた。子ラットに人工的に子宮内膜症を生じさせたところ、2週間後になっても子宮内膜症の持続を示すアレルギー反応が確認されたという。

一方、通常のきれいな空気ですぐに育った子ラットは、2週目にアレルギー反応はほぼ収まった。また子宮内膜症に関係するたんぱく質の遺伝子の働きが、排ガスを浴びたラットでは、きれいな空気ですぐに育った

ラットで実証

ものに比べ、著しく活発であることも分かった。研究グループは、胎児や幼児期に浴びた排ガスが子宮内膜症に関係する可能性が高いと推定している。【河内敏康】

子宮内膜症に詳しい石丸忠之・元長崎大教授（生殖内分泌学）の話 ディーゼル排ガスが子宮内膜症の維持や悪化に影響する可能性を初めて示した点で非常に興味深い研究だ。今後、サルなどの動物でさらに確認することが重要だろう。